

19 宮沢賢治短歌とそのゆくえ（中学時代篇）

【全2回】／開催方法：現地

しまだ たかすけ
島田隆輔

中村元記念館東洋思想
文化研究所研究員



受講料	一般料金：¥4,200 早割価格：¥3,200（納入期限：5月2日）
-----	------------------------------------

【日程】【全2回】 1回／月 第2日曜日
(5/8、7/10)

【時間】10：30～12：00

■受講に必要なもの

講義内で適宜資料を配布（購入不要）

宮沢賢治の文学的出発は、盛岡中学校時代にはじまる短歌制作だった。その歌日記は盛岡高等農林学校時代も継続して、卒業後も大正十年4月までつづいたが、12月に農学校の教師になると途絶してしまう。

当時の歌は八百首あまり、自筆の歌集が大正十一年頃にまとめられた。読みといてみると、明治四十三年の題材がその最初期かとおもわれる。

教師時代以後の文学的営為は、心象スケッチと童話の制作にうつって、大正十三年にはもう『春と修羅』や『注文の多い料理店』として刊行するほど執心して、教師を辞したのちも最晩年まで熱心にとりくまれてゆくことになる。

短歌の制作はまるでわすれ去られたごとくである。ところが、昭和四、五年頃からかつての歌集に、短歌の推敲ではなく、文語詩に改作しようとする書きこみが、すくなくみえるようになる。

ここではその改作の実態について、中学校時代の歌群のなかにみえる、いくつかとりあげて、その中には島根・松江にかかわるものがあるので、解説をこころみてみたい。

【参考書】

講義中に紹介したい。